

★「変化の兆し」の現れとそのゆくえを考える★

往復書簡

学校「五日制推進」をみる「教科再編論」のゆくえ

往信——教科編成の原則の再検討を

静岡大学助教授 馬居政幸

一 学校週五日制への思い

往復書簡という形式にとまどっている。顔の見えない対話は苦手である。まして、教育課程の専門家である安彦先生に、教科再編論についての私見を提示することは気が重い。ただ幸いにも、本誌九月号の冒頭に、「思い切った制度改革に踏み込むとき」と題し、安彦先生が学校週五日制を新たな教育学と教育制度全体の改革の契機として論じられているのを読み勇気を得た。私もまた、この施策を、子供の学びと育ちの世界をトータルに見直し、人が一人の人間として生きる上で必要な教

育システムを再構成するチャンスとして位置づけているからである。

ただし、やはり本誌九月号で、私が教科再編論に関して特別の情報を持つ者でないことを述べた。五日制に関しても公にされたもの以外に知る立場ではない。そのため私見を若干提示し、安彦先生にその可否をご教示願う目的で執筆することをお許し願いたい。

二 時間数調整は進んでいるが

そこで、私なりの五日制推進状況の評価を提示するために、文部省の指定により月二回土曜休日を試行している静岡県内の小学校の先生の話を紹介す

ることから始めたい。

「週二回（土曜休み）でしたらなんとか大丈夫です。始めはとまどいましたが、授業時間を工夫すれば十分やっています。遠足を理科の野外観察の授業にするなど、いろいろ試みましたが、現在はおもにもどし、遠足は遠足としてやっています。これまで最低時間数以上にやっていましたので。でも他の県では大変なところもあるようです。特に、年間授業時間数を最低でやっていたところなどは……」

もともと、時間数はともかく、新しい学力観が示すような、学校週五日制を契機にした教育改善はなかなか進んでいないのが実情です。むしろ先生方よりも家庭や地域の人達の方が慣れてきて、子供との関わり方や生活のリズムを積極的に変えてきています。教師の方は、低学年の先生方は生活科の影響で変化が現れていますが、高学年はまだまだです。是非、先生このへん

のことをしっかりと書いて下さい。」

この話から私は、次のことを理解した。まず、月一回土曜休日に伴う授業時間削減に関しては、ほぼ順調に調整されている様子。当初、受け皿問題（嫌いな言葉だが）として騒がれた家庭や地域の状況も、案ずるよりも生むが易し^①の典型のようである。実際に各種調査では、完全五日制の支持者が多数派になってきている。ただし学校教育の質的な転換についてはこれからその意味で、現場の状況から教科再編とその論理のゆくえを占うには時期尚早というべきか。ただしヒントはある。次のような意識が先生方に共有されるようになったと思うからである。

一つは五日制は授業時数の問題ではなく、学校のあり方を変えることとセットでなければならないこと。二つはその改変が学校の外の人達との連携を必要とすること。三つは休みの日が学校教育の延長（勉強のための休息や宿

題を含めた勉強の補完）ではなく、固有の教育的（遊び）価値をもつこと。

三 教科再編論の方向は

以上のことをふまえ、私は教科再編論は既存の教科の改廃・組み合わせや時間削減の問題からではなく、改めて子供の現実に謙虚に学ぶことから再出発すべきと考える。そして、子供の生きる場である家庭や地域社会あるいは情報環境や遊びの世界との関係において、学校教育固有の価値とそのあり方を再検討することが必要と考える。

新しい学力観、生活科、選択教科、

開かれた学校、いずれも教室で教師が黒板と教科書により教える授業の改変を求めたもの。子供一人一人とその生活世界に即した教育課程と教育実践をいかに創造するかが課題であるはず。一人の教師のみで担えるほど子供の現実には甘くない。日常出会う様々なヒト、モノ、コト^②に、子供が「自ら学

び習い育つ^③」ことができるかどうか成否のポイント。それを「支え援ける人」を、自らも含め子供の生きる世界にどれほど教え育てられるか。これが学校と教師の新たな課題と考える。

このような観点から、教科の再編成の方向を次のような原則で考えたい。一つは学習の総合化を担う教科の必要性。それも単なる学問上の知の総合ではなく、学習者の日常生活知と往還する総合性が必要。それには学校の外の「ヒト、モノ、コト」に子供が直接働きかける授業実践を保障する教科構成が必要である。二つは分科の学に基づき教科編成を越える教科の必要性。たとえば、国際化やノーマライゼーションの進展、超高齢社会を支えるボランティアの育成、社会の少子化に伴う社会システムの改変、これらに対処しうる教科編成が必要ではないか。このような私見を教科編成に具体化するための課題は何か。その可否も含め、ご教示願えれば幸いである。

★「変化の兆し」の現れとそのゆくえを考える★

往復書簡

学校5日制推進にみる「教科再編論」のゆくえ
復申——道徳教育を外へ、学問・芸術の文化活動を内へ

安彦忠彦
名古屋大学教授

一 週五日制の学校教育学

日本の学校を考えるとき、社会教育的観点から見るとどうなるのか。私は馬居先生の文章を深い関心をもって読んだ。馬居先生のご提案は、私なりに整理すると次のようになる。

(1)五日制は「学校のあり方」を変え、(2)学校の外の人達との連携を要すること、(3)休みの日に固有の教育的価値をもたせること、の三つの基本方針をもとに、「教科再編」の観点として、①子どもに現実謙虚に学び、その生活世界に即した教育課程を創ること、②子どもが家庭・地域社会、情報環境や遊びとの関係で、学校教育固有の価値とあり

方を再検討すること、の二つ(ないし①と②を一体と見れば一つ)を提示し、さらに具体化の原則として、(A)学習の総合化を担う教科の必要性—学習者の日常生活知と往還する総合性として学校外のモノ、ヒト、コトに子どもが直接働きかける授業実践を保障する教科構成、(B)分科の学に基づく教科編成を越える教科の必要性—国際化やノーマライゼーションの進展、超高齢化社会のポランティア育成、社会の少子化に伴う社会システムの改変などに対処しうる教科編成、の二点をあげている。私も大筋において賛成である。ただ私は、馬居先生が子どもの側から考えているのに対して、もう少し理論的に「週五日制」の学校教育について考える方向で補ってみたい。

私は、もし「週五日制」が完全実施された場合は、日本の学校教育は根本的に変わらざるを得ないと思う。こう言うと、「何を大げさな。欧米の学校はほとんど五日制ではないか」と思われる方もおられよう。しかし、その欧米の五日制の学校の特徴の一つは、「道徳教育ないし人格性に関する部分」を親や家庭(または地域・社会など)に任せ、学校の中ではほとんど行わないという点である。

日本の学校教育を「週五日制」とする場合、この点において教育行政当局も親も、もっと明確な態度を示すべきである。現在、この点があいまいなままになっているのはおかしい。私は、基本的には日本も欧米と同じ方向を取るべきだと考えており、この点で従来

の「週六日制」の学校教育と根本的に異なることを踏まえて、「週五日制の学校教育学」を構想すべきである。

二 学校教育固有の役割は何か

馬居先生も言われるように、今後は益々「学校教育の固有性・独自性」が問われることになる。この点、私は、生涯学習時代の学校は「子どもにとって発達上最も重要な時期の、社会的教育的サービス機関の一つ」となる位置づけで考えてきた。

ここで「サービス機関」とは、主体があくまでも親と子どもであって、教師や教育行政当局はその助言者、支援者、奉仕者になるということである。

そこで、具体的な教科はどう構成されるのかと言え、馬居先生の言われる「子どもの生活に即した総合性のある教科編成」の必要性を私も認めた上で、しかし、もう少し歴史的、社会的

に広い視野から学校をとらえ直してみる必要があると思う。

一つは、「すべての子どもに、人間として生きる上で最低必要な学力としての小学校三〜四年頃までの読書算の技能の習得」を保障すること。この私の言う「基礎学力」はこの時期に系統的・継続的・計画的に習熟へと育てられねばならず、それには「学校とそのため」の専門家としての教師」が必要である。

二つは、佐藤忠男氏も言っていたことであるが、「学校でなければ取り上げられないことのない、子どもに身近ではないが人間にとって極めて重要な問題に取り組む活動」が用意されなければならない。これは馬居先生の(A)の原則と部分的には対立する。世界平和の問題、人種差別、環境、人口などの問題は、親や家庭、地域では取り上げ方がまちまちになりやすい。しかしこれは、人間にとって根本的な問題なの

で(私は「究極的な問題」と呼ぶ)、意図的・計画的に教育の専門家がすべての子どもに共通に教えるべきである。ここに、馬居先生の(B)の「総合性」の提言が生かされる余地がある。

三つは、「五日制になっても学校はやはり知性・学力を主として育てる場」であり、他はそれに役立つ限りで含めるべきものであること。私は「学校縮小論」ないし教育課程を学問・芸術などの文化に依拠して構成する「学校文化論」を採る。

このような文化的活動を、教師という専門家の助けを得て、自由に、楽しく、のびのびと、しかも確実に行える場所として、学校に社会教育的機関の性格をもたせるのである。そこでは、新たな、創造的文化活動を行える教科や領域が豊富に用意されていることが望ましい。私なりの夢である。

特集 「時代の変化」を読む教育キーワード19

21世紀の教育界―変化の構造をどうシミュレートする……………
 庄司和晃Ⅱ「その日暮らし」のささやき／新堀通也Ⅱマクロな変化とミクロな変化
 ／菱村幸彦Ⅱ教育をより柔軟にとらえる／森一夫Ⅱ教科再編を通しての「学力」の
 見直し／森隆夫Ⅱ入試はファジーで、自己規制は強化で

往復書簡 「変化の兆し」の現れとそのゆくえを考える

《谷岡》 《復中》

不登校の増大にみる「学校制度」のゆくえ…………… 笠間達男↓伊藤隆Ⅱ
 丸刈り反対にみる「学校の規則見直し問題」のゆくえ 加藤宣彦↓木原孝博Ⅱ
 組合離れにみる「教師の意識変化」のゆくえ…………… 横山 洋↓牧田 章Ⅱ
 心の健康問題にみる「メンタルヘルス」のゆくえ…………… 谷 健↓坂本昇Ⅱ
 生活経験の希薄化と「教職研修」のゆくえ…………… 斎藤哲郎↓小島弘道Ⅱ
 女教師の増加にみる「学校の質的变化」のゆくえ…………… 喜多明人↓牧 昌見Ⅱ
 活字離れにみる「メディアミックス化」のゆくえ…………… 多田元樹↓水越敏行Ⅱ
 核家族化にみる「家庭教育」のゆくえ…………… 市川千秋↓宮坂広作Ⅱ
 出生率低下にみる「親の意識変化」のゆくえ…………… 深谷和子↓相原次男Ⅱ
 エイズにみる「病気と差別」のゆくえ…………… 増川正志↓田能村祐麒Ⅱ
 学校5日制推進にみる「教科再編論」のゆくえ…………… 馬居政幸↓安彦忠彦Ⅱ
 生活科にみる「総合学習」のゆくえ…………… 清水毅四郎↓中野重人Ⅱ
 道徳調査にみる「道徳教育見直し」のゆくえ…………… 尾田幸雄↓荒木紀幸Ⅱ
 環境教育と「学習の行動化」のゆくえ…………… 片上宗二↓有田和正Ⅱ
 『小学校に英語』にみる「国際化」のゆくえ…………… 大鐘雅勝↓藤岡信勝Ⅱ
 教育機器の充実と「ソフトの開発」のゆくえ…………… 永野和男↓松田稔樹Ⅱ
 偏差値問題にみる「受験制度の改革」のゆくえ…………… 亀井浩明↓森部英生Ⅱ

イデオロギー論争と「日の丸・君が代問題」のゆくえ…………… 大石勝男↓高階玲治Ⅱ
 進学者減にみる「大学の質的量的変化」のゆくえ…………… 上寺久雄↓明石要Ⅱ
 今「教育研究開発は」どんな方向で進んでいるのか

「教育課程」推進校における研究の方向…………… 椎名 仁Ⅱ
 「学校5日制」推進校における研究の方向…………… 丸山義王Ⅱ
 「道徳教育」推進校における研究の方向…………… 上杉賢士Ⅱ
 「奉仕等体験活動」推進校における研究の方向…………… 寺脇 研Ⅱ
 「エイズ教育」推進地域における研究の方向…………… 武田 敏Ⅱ
 「教職員のライフプラン」の研究の方向…………… 加戸守行Ⅱ
 「教職員研修」の研究の方向…………… 奥井智久Ⅱ
 「ティームティーチング」の研究の方向…………… 高浦勝義Ⅱ

研究会案内 千葉県東金市立鶴嶺小学校・八ノ長野県伊那市立伊那小学校……………

文教ニュース 登校拒否児童・生徒の実態／学校図書館の活用は不十分……………

連載 「ティーム・ティーチング」をどう導入するか…………… 11

潜在的カリキュラムとしてのティーム・ティーチング(3)…………… 新井郁男Ⅱ

連載 新しい時代の「主任の仕事」…………… 11

校務分掌活動における主任の役割をどう見直すか…………… 根本正雄Ⅱ

連載 教師生活終点からの「意見」…………… 11

派ラシティアの本質は秘密…………… 関根正明Ⅱ

連載 管理職試験の教育論文にみる筆者の弱點…………… 11

柱で「一校を託せられるか」が読み取られてしまう(2)…………… 齋藤昭次Ⅱ

連載 私の読書日記…………… 11

弱みの諸相…………… 堀内 守Ⅱ

★「ア・ラ・シ」・「臨臨」に使える「名詞・動詞」アラカルトⅡ安藤修平／表紙②・わが校の自慢Ⅱ沼沢千佳子／表紙④
 ・講話に使える学校の植物にまつわる話題Ⅱ小森栄治
 ★表紙写真Ⅱ(株)モノトシ